

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：24402
研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)
研究期間：2013～2015
課題番号：25300027
研究課題名(和文) アジアにおける社会的包摂型アーツマネジメント

研究課題名(英文) Socially inclusive arts management in Asia

研究代表者

中川 眞 (NAKAGAWA, Shin)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：40135637

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,200,000円

研究成果の概要(和文)：ハイアートの市場を前提に市民への配分を的確に実現する手法として欧米型のアーツマネジメントは、市民階級が作りあげてきた。美術館などの施設を整え、経済的な支援体制を組み上げ、需要と供給のバランスを見極めながら政策化し運営するのが目的である。本研究では、アーツマネジメントを、グローバル化された世界のなかで大きな歪みや困難さをまずアジア社会の現状に即して、社会的包摂の概念を大きく取り入れた形で再構築することを目的としている。それを一言でいえば「アーツマネジメントによる世直し」である。そこでは社会とともにアートそのものの変革をも促すことになる。

研究成果の概要(英文)：Western-style arts management is a technique of accurately distributes art products by and for the members of the bourgeoisie. It is premised on the existence of a market for the consumption of such art, which is frequently referred to as "high art". In this research project, we offer to challenge the orthodox, the Western model of arts management, which caters on the management of institutions, and propose the possibility for a distinctly Asian model. We can conceive of a model of arts management, in practice and as an academic subject, which is more in line with the nature of community and society in the various regions of Asia. Economic conditions have necessitated the shift toward socially inclusive arts management. In this context, people have begun to focus on arts activities as a channel for connecting social excluded persons in society. This Project is considered 'social reform through arts management'.

研究分野：アーツマネジメント、サウンドスケープ、民族音楽学

キーワード：社会的包摂 コミュニティ アーツマネジメント 共助 ポストコロニアル 国際協力 ネットワーク

1. 研究開始当初の背景

本研究の主題を端的に言えば「アーツマネジメントによる世直し」である。アートはマネジメントがあって初めて社会に浸透する。アジアをフィールドとするのは、グローバリゼーションという環境のもとでの様々な社会的・経済的矛盾や格差とともに、自然災害や地域紛争などが絶えぬなか、特に都市部においてその影響が顕在化しており、それと対峙し克服しようとする新たなアートのあり方が活発になっているからである。一方で、アジアには共助の思想など、コミュニティベースの実践が伝統的に根強く、それを活かすことができる。本研究は予備的に社会的格差と大震災による甚大な被害に苦しむ日本の現場で始まったが、それをアジアに拡張しようとするものである。一言でいえば、中産階級を前提としたハイアート（高級な芸術）中心の欧米型アーツマネジメントに異議を唱え、災害や社会的課題の多いアジア地域の現状に即した「社会的包摂型アーツマネジメント」の提唱、ということになる。

2. 研究の目的

グローバリゼーションがもたらす極端な地域間格差や頻発する自然災害（地震や洪水、噴火等）、テロ、地域紛争などによって疲弊しているアジアの諸都市において、アートを媒介として社会的課題を解決・克服し、コミュニティを再構築あるいは再生する試みが、21世紀になって顕著に現れてきている。本研究では、インドネシア、タイをフィールドとして、アートによるコミュニティ再構築の実態を克明に記録・分析し、その手法と背景を解明するとともに、それを実世界で応用しながら、アジアにおいて共同して取り組める新たな人文科学の一領域としての「社会的包摂型アーツマネジメント」の確立をめざす。また、そのための学術プラットフォーム（インフラ等）の構築に尽力する。

3. 研究の方法

2カ国（タイ、インドネシア）における現地調査が軸であるが、それぞれ首都（巨大都市）と中都市という性質の異なる都市に調査地を設けている。手法としては文化人類学的な視点を中心に、社会包摂論・文化政策論・アーツマネジメント技術論などを取り入れたもので、調査→データ集積→分析→理論提示→現場へのフィードバックという手順をとる。また、研究者・実務家の国際ネットワーク強化に向けたアジア・アーツマネジメント会議を毎年開催し、知見や手法の共有化をはかる。そのための大学間連携ネットワークの体制づくりも重要であり、共有アーカイブの設置やアーツマネジメント大学院の教育プログラムの監修など、調査地4都市に所在する大学（院）を調査研究のハブ的な拠点として整備・充実させる。さらに本研究の将来構想の一環として、新たに5カ国の調査地

（現地研究者・実務家）との共同研究に向けた交渉を開始し、研究の持続的発展をはかる。

4. 研究成果

初年度（平成25年度）では、活動の中心は海外でのフィールドワークと国際会議の開催、学術誌の出版という実務ベースのものであったため、その活動内容と、そこから得られた知見を記述すると次のようになる。本研究はアジア型の社会包摂系アーツマネジメントの実態調査、理論構築、研究・実践のネットワーク形成を主目的としているが、フィールドワークは、当初予定のタイ、インドネシアのほか、ロンドンで重要な国際会議（都市創造性学会）が行われたため、急遽そこでの情報収集も追加した。

フィールドワークは、タイにおいてはバンコクのスラム等貧困地域で活動する人形劇団（NPO）や都市過疎化の進む旧市街にて、インドネシアにおいてはジョグジャカルタの地域密接型のアーツマネジメント稼働地区にて重点的に行うとともに、それぞれの地域のアーツマネジメントの実務家との交流、ならびにチュラロンコン大学、インドネシア芸術大学の研究者との意見・情報交換を行い、貴重な資料・情報を収集することができた。

会議は当初予定のアジア・アーツマネジメント会議のほか、バンコクにて都市文化研究フォーラム（Arts and Social Outreach - Designs for Urban Dignity）、ジョグジャカルタにて都市研究フォーラム（Making New Cultural Tradition for Sustainable City）といった関連会議を開催した。それらは都市における社会包摂的な観点からアートの意義を問うものであり、特にアジア・アーツマネジメント会議は本科研の研究者以外にも日本から6名のアーツマネジメント実務家が参加し、タイの実務家・研究者と議論を行い、本研究の進展にとって大変有意義であった。特に、タイではコミュニティをベースにしたアート活動が、教育や人権運動と密接に結びついているのが特徴的であり、理論研究にも影響が与えられることとなった。成果のとりまとめとして、学術誌 Urban Culture Research の編集を行ったが、刊行は平成25年度内に若干間に合わず平成26年4月となったが、アートのアクセシビリティに関する論考が中心となっている。

2年度（平成26年度）では、現地調査については2014年6月にインドネシアで行われた「創造音楽祭」がメインとなった。これは2006年のジャワ島中部大震災の後に始まった「子どもの未来のための教育」プロジェクトであり、社会問題を創造的に解決するための予備的教育の効果が高いことが確認された。

社会包摂系のアジア型アーツマネジメントのネットワークづくりに資する第9回アジア・アーツマネジメント会議を、国際交流基金との共催でクアラルンプールにて開催

した。多民族共生政策のなかに潜む歪みを、アーツマネジメントによって克服する試みが多く紹介され、本研究の課題と直結するものであった。と同時に、課題の多様さも際立ち、それに対応する方法論の確立が直近の目標であることが確認できた。発表資料や論考などのアーカイブ化を進め、その一部をウェブサイトで公開した。

本研究と関連の深い都市問題を扱うフォーラムをバンコクとジョグジャカルタで開催し、経済成長が順調な東南アジアの各都市において、繁栄の陰に隠れがちな問題、例えば LGBT と呼ばれるジェンダー問題のほか、抜け出すことのできない貧困、差別に苦しむ少数民族の人々など、多層な問題に対して文化的側面からアプローチし、解決をはかるうとする研究について討議を深めた。

社会包摂型アーツマネジメントの理論化については、イギリスのコミュニティアート、オーストラリアの Community Cultural Development の理論を検討しながら、アジアへの適用可能性について試論の構築を開始した。現在見られるのは、欧米型アーツマネジメントをアジア社会にカスタマイズするという折衷型が多いが、その現実的処理を認める一方で、理論的なレベルでの、よりアジアの伝統知に根ざす方法を見出そうとした。それは「ハイレベルなアマチュア」すなわち専門化せず、コミュニティ成員の多くが高いオトリティでアーツマネジメントに関わり得る方法を確立することである。

3年度（平成27年度）では、アジアにおけるアーツマネジメント研究者・実務家のネットワーク形成にいっそう拍車をかけるべく、バンコクでの都市文化研究フォーラム、ジョグジャカルタでの都市研究フォーラム、マニラでのアジア・アーツマネジメント会議といった国際会議の開催に尽力するとともに、各研究者は論文などの形で成果をとりまとめた。特に、フィリピンのアート状況については日本では深く知ることができず、事前調査と会議に参加することによって、協働の新たな地平が開かれた。

東南アジアに現れる問題群と諸活動は必ずしも日本のそれと完全に共通するものではないが、広い意味で社会的排除に抗する取り組みとして捉えられ、研究の国際連携の意義は大きい。本年度の調査過程では瞠目すべきアーツマネジメントの手法にも出会った。例えば、コミュニティを支える「共助」の組織を最大限に動員する方法であり、フィリピンでは少女買春などの子ども虐待に対してコミュニティぐるみで支援し、その過程で音楽や工芸の手法が取り込まれるなど、深刻な社会問題に対してアートを効果的に介入させている現場が数多くみられた。伝統的な社会関係資本を再活用して公共圏を確保する手法は、欧米発祥のアーツマネジメントをアジアに適用すべくカスタマイズするのではなく、アジア固有の慣習に基づくオリジナルなアーツマネ

ジメントの形成可能性を示唆する。但し、アートが「便利」であるがゆえに、深刻な社会構造そのものの打開ではなく、とりあえずの「逃げ道」となる可能性も大きく、行政など何らかの公的機関との連携の必要性も明確となった。

また理論的側面ではこの3年間で社会包摂型アーツマネジメントのエティカについて考察を深めることができた。それは以下のように要約できる。

社会的に弱い立場、排除されている人々の声は小さく、また声を出しにくい。排除されていない人々にはその声が届かない（聞こえない）。排除されている人々は、排除を訴えることなく自分ひとりで背負ってしまう。それはもちろん個人で背負いきれるものではない。どこかで生活の破綻として現れ、自らを苦しめる。最も重要でかつ最も困難な問題は、ある人々を孤独な境遇に追いやりながらも、私たちがそういうふう意識しない『分断（segregation）』の問題である。

排除される人々の内面の問題、すなわち不可視の壁以外に、支援しようとする側のなかにも不可視の壁がある。彼らとはもすれば自分という存在を括弧にくくり、自らを安全地帯に置いたまま対象に向かいがちである。しかも、マジョリティという立場からマイノリティを視るという、「上からの視線」を無意識に持ってしまふ。この「上からの視線」はしばしば不均衡な「支援する／支援される」関係をつくる。そういった関係をフラットにする必要がある。しかし完全にフラットな関係というのはない。「非対称的な関係」は当事者間で不可避免的に形成される。問題なのは、パワーをもっている者がその非対称に気づきにくいという点である。

社会包摂型アーツマネジメントのミッションは、排除を受けている人々と協働し、表現手段を通して何らかのコミュニケーションのチャンネルを確保して排除的なコミュニティを包摂的なそれへと変革していくことにあるが、少し踏み込んでいうならば、排除されている人を包摂するというより、もっと手前の基礎的な問題、すなわち支援する側／支援される側といった固定した関係・構造を崩すところが初めの一步である。排除すべきは壁、垣根である。しかし、その難しさは目に見えないところにある。段差があれば、スロープにすればよい。しかし多くの壁はそのように可視的ではない。我々の心のなかにあたり、集合的・歴史的に慣習化されたものであつたりする。それをひっくり返したり、別の角度から見直したりできるのがアートの特性である。アートは堅固なインフラ、建物や制度をつくらないが、ソフトなインフラ、意識や行動規範にかかわるのである。しかしそれがソフトであるがゆえに計量化、定量化が困難であり、評価の困難さに直面するのである。

以上のような知見をさらにアジア各地で実際に即して精査してゆきながら、地政学的な必然から生み出されてくるアジアの社会包摂型アーツマネジメントを体系化、確立することによって、この学問を生んだ欧米への人文・社会科学の学術的応答とすべくブラッシュアップする予定である。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 15 件)

中川眞、現代社会におけるアートの位置 - 社会包摂型アーツマネジメントの可能性、市大都市研究の最前線、大阪市立大学都市研究プラザ(編) 査読無、1巻、2016、76-84

岩澤孝子、青少年の芸術文化活動とコミュニティタイのプーンティニー・ディチャン・プロジェクト、芸術・スポーツ文化学研究2、北海道教育大学岩見沢校芸術・スポーツ文化学研究編集部編、大学教育出版、査読無、1巻、2016(頁数未定)

中川眞、アートによる社会包摂?、地域に根ざしたアートと文化、共同事業体(編) 査読無、1巻、2016、29-43

岩澤孝子、コミュニティアートにおける青少年の力、地域に根ざしたアートと文化、共同事業体(編) 査読無、1巻、2016、64-69

藤野一夫、シンポジウム 『演劇の公共性を考える』、演劇学論集紀要、査読有、61巻、2015年、81-106

藤野一夫、加川広重の巨大絵画三部作—3.11以後のプロジェクト、アートマネジメント研究、査読有、2015年、97-103

FUJINO Kazuo、Kagawa Hiroshige: Trilogie einer Katastrophe、Elegant Gathering in a Scholar's Garden Studies in East Asian Art in Honor of Jeong-hee Lee-Kalisch、査読無、vol.1、2015年、292-298

岩澤孝子、環境教育としてのクリエイティブ・ダンス・ワークショップ—タイにおける The Water Children プロジェクト、北海道教育大学紀要(教育学科編) 査読有、65(2)巻、2015、303-317

藤野一夫、ベルリン芸術祭—連邦政府による主と文化政策の課題と可能性、文化経済学、査読有、11巻(2)、2014、69-73

藤野一夫、恣意を超えた純粹に人間的なもの—《ニーベルングの指環》における個人

と社会の自律的生成、ワーグナーシュンポジオン 2014、査読有、1巻、2014、69-89

藤野一夫、ジェントリフィケーションと都市への権利 —グローバルに考える、利賀から世界へ—公益財団法人舞台芸術財団演劇人会議、査読有、6巻、2014、146-148

梅田英春、ロンボック島におけるゴング工房と楽器商、沖縄芸術の科学、査読有、26号、2014、120-130

藤野一夫、創造都市と 都市への文化権のディレンマを超える復興の構想力、社会文化研究、社会文化学会、晃洋書房、査読有、第16号、2014、7-38

中川眞、都市防災のための地域劇団創生プロセス、都市防災研究論文集、査読有、1号、2014、43-49

NAKAGAWA Shin、Art as a Mechanism for Increasing Social Accessibility、Journal of Urban Culture Research、査読有、vol.7、2013、43-50

[学会発表](計 34 件)

NAKAGAWA Shin、Encouraging the dialogue between researchers and practitioners、The 10th International Conference of Asian Arts Management、2016年3月17日、De La Salle University (Manila, Philippines)

NAKAGAWA Shin、Beyond Dichotomy of Urban vs. Rural、The 14th Urban Culture Research Forum、2016年3月3日、Chulalongkorn University (Bangkok, Thailand)

平田オリザ、対話のレッスン〜コミュニケーション教育の現在〜、震災復興特別講演会、2016年2月23日、福島県教育センター講堂(福島県福島市)

NAKAGAWA Shin、A New Community Management Through Arts and Cultures (Keynote lecture)、The 14th Urban Research Forum in Yogyakarta、2016年2月23日、Gadjah Mada University (Yogyakarta, Indonesia)

岩澤孝子、タイ・コミュニティ教育における伝統芸能の役割、舞踊学会第67回大会、2015年12月16日、福島大学(福島県福島市)

NAKAGAWA Shin、Arts & Social Change、Djung Forum “Cross-border

Seminar”、2015年11月22日、Former Tarapat Suksa School Bangkok (Bangkok, Thailand)

平田オリザ、新しい広場をつくる、アートミーツケア学会基調講演、2015年11月8日 大分大学(大分県大分市)

中川眞、コミュニティを編み直す、アートミーツケア学会基調講演、2015年11月7日 大分大学(大分県大分市)

中川眞、ガムラン、釜ヶ崎芸術大学、2015年10月23日、禁酒の館(大阪府大阪市)

平田オリザ、少数者が世界の見方を革新する、アール・ブリュット国際フォーラムプレ企画講演、2015年10月18日、ヴォーリズ学園(滋賀県近江八幡市)

中川眞、音景/サウンドスケープ、釜ヶ崎芸術大学、2015年10月13日、太子会館老人憩の家(大阪府大阪市)

岩澤孝子、タイにおける青少年芸術文化活動とコミュニティ創造、日本タイ学会第17回研究大会、2015年7月12日、東京学芸大学(東京都小金井市)

中川眞、社会包摂型アートマネジメント、文化庁大学活用事業、2015年7月1日、船場アートカフェ(大阪府大阪市)

平田オリザ、東北から水俣を考える～地域の自立とは何か、水俣病記念講演会、2015年5月9日、有楽町マリオン朝日ホール(東京都千代田区)

NAKAGAWA Shin、The Role of Universities against Neoliberalism、2015年3月5日、Gadjah Mada University (Yogyakarta, Indonesia)

IWASAWA Takako、The Promotion of Sustainable and Creative Community Building through Thai Youth Puppet Theatre、The 13th Urban Culture Research Forum、2015年3月3日、Chulalongkorn University (Bangkok, Thailand)

NAKAGAWA Shin、Listening to the Unheard Voices、The 13th Urban Culture Research Forum、2015年3月2-3日、Chulalongkorn University (Bangkok, Thailand)

平田オリザ、文化を事業化する沖縄の可能性、アートキャンパス IN OKINAWA、2015年2月4日、那覇市ぶんかテンプス館(沖縄県那覇市)

平田オリザ、いま、福島からの演劇、はまなかあいづ文化連携プロジェクト、2014年12月27日、大和川酒蔵北方風土館 良志久庵(福島県喜多方市)

NAKAGAWA Shin、Critical Issues of Asian Arts Management、The 9th International Conference of Asian Arts Management、2014年12月17日、Multimedia University (Kuala Lumpur, Malaysia)

21 NAKAGAWA Shin、Introduction to Socially Inclusive Arts Management、The 9th International Conference of Asian Arts Management、2014年12月16日、MAP Publika (Kuala Lumpur, Malaysia)

22 平田オリザ、基調講演、静岡大学シンポジウム、2014年11月30日、サールナートホール(静岡県静岡市)

23 NAKAGAWA Shin、Locating arts carefully– Mechanism for increasing social accessibility –、The 2nd International Conference for Asia Pacific Arts Studies、2014年10月31日、Institut Seni Indonesia (Yogyakarta, Indonesia)

24 中川眞、音景/サウンドスケープ、釜ヶ崎芸術大学、2014年10月27日、太子会館老人憩の家(大阪府大阪市)

25 中川眞、アートと社会的包摂、そしてアジア、文化庁大学活用事業、2014年9月17日、船場アートカフェ(大阪府大阪市)

26 平田オリザ、わかりあえないことから～コミュニケーション能力とは何か～、日本糖尿病学会、2014年5月23日、大阪国際会議場(大阪府大阪市)

27 中川眞、今、そこにある危機 - 我々はどうのり越える?、大阪市立大学文化交流センター講座、2014年5月21日、大阪市立大学文化交流センター(大阪府大阪市)

28 平田オリザ、研究会講演、和歌山県国語教育研究会、2014年5月13日、和歌山県立図書館(和歌山県和歌山市)

29 中川眞、社会実験としての神楽宿、日本音楽学会東日本支部第21回定例研究会、2014年3月22日、岩手大学(岩手県盛岡市)

30 NAKAGAWA Shin、Arts and Social Outreach、The 12th Urban Culture Research Forum、2014年3月4日、Chulalongkorn University (Bangkok,

Thailand)

31 NAKAGAWA Shin, Toward the Sharing of Asian-Style Arts Management, The 1st International Conference for Asia Pacific Arts Studies, 2013年11月12日、Institut Seni Indonesia (Yogyakarta, Indonesia)

32 梅田英春, 文化の動態を視野にいれた東南アジアのゴング研究—パネルディスカッション: 東南アジアのゴング文化研究の視角, 2013年11月10日、東洋音楽学会第64回大会、静岡文化芸術大学(静岡県浜松市)

33 中川眞, 世界の表現活動・市民活動とつながる結節点、全国アート NPO フォーラム in 神戸, 2013年11月9日、ArtTheater dB KOBE(兵庫県神戸市)

34 中川眞, 東北の伝統文化と現状、民族芸術学会第29回大会, 2013年4月27日、群馬女子大学(群馬県佐波郡)

〔図書〕(計6件)

平田オリザ, 講談社学術文庫、対話のレッスン, 2015, 264

藤野一夫 他, ベルリン日独センター、日本文化政策学会、ザクセン文化基盤研究所, 2014年度 知的交流会議報告書「文化政策による中小都市の再生—ドイツ・中欧と日本の対話」, 2014, 246

平田オリザ, 徳間書店、世界とわたりあうために, 2014, 239

平田オリザ, 岩波書店、新しい広場をつくる—市民芸術概論綱要, 2013, 240

藤野一夫 他, 美学出版、行政改革と文化創造のイニシアティブ, 2013, 317(151-178)

中川眞, 和泉書院、アートの力, 2013, 203

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中川 眞 (NAKAGAWA Shin)
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 40135637

(2) 研究分担者

平田 オリザ (HIRATA Oriza)
東京藝術大学・社会連携センター・教授
研究者番号: 90327304

藤野 一夫 (FUJINO Kazuo)
神戸大学・国際文化学研究所・教授
研究者番号: 20219033

岩澤 孝子 (IWASAWA Takako)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号: 40583282

梅田 英春 (UMEDA Hideharu)
静岡文化芸術大学・文化政策学部・教授
研究者番号: 40316203